

地域と学校 その8

緊張の公開ワークショップ

小松 尚(名古屋大学大学院環境学研究科准教授)

12月に開催された共有委員会(学校運営協議会)で、学校が子どもたちに行った学校生活や毎日の勉強についてのアンケート結果が校長先生から報告されました。ほとんどの子が学校は楽しく、毎日の勉強はわかりやすいと答えていました。子どもたちの理科離れが心配される昨今ですが、3・4年生の好きな科目第1位は理科だったことに、驚きの声が上がりました。さて今回は、これまでの検討成果を広く報告し、議論する公開ワークショップの様子をお話します。

いしくれ
石樽への誘い

第10回目の建設委員会は、公開ワークショップとして開催されました。この連載の最初(その1)に書きましたが、私の石樽デビューはこの公開ワークショップでした。

1ヵ月ほど前に設計事務所のOyさんから声をかけられ、私は初めて石樽小学校のこと、そしてこの校舎の建て替え計画のことを知りました。後日、Oyさんがやって来て、計画の経緯を説明し、公開ワークショップに出席して計画にコメントして欲しいと依頼されたときには、嬉しい反面、実は少し心配もありました。

理由は2つありました。一つは、どうして私に頼むのかということ。私はその頃、大学施設の計画には7~8年関わっていましたが、同じ教育施設でも小学校の計画や設計は経験がなく、一般的なこと以上の知識も経験もありませんでした。近隣の他大学には小学校の計画に造詣の深い先生方もおり、なぜ私に?というのが率直な感想だったのです。もう一つは、計画の途中で助言を頼まれるということは、計画自体や検討の場に何か大きな問題があるのではないかと思ったのです。前にも書きましたが、地域住民が計画に関わる場合は往々にして陳情の場になったり、日頃の不満が爆発する場になることも無いとはいえません。私はちょうどそんな経験をした後だったので、今回ももしかするとそんな役回りが期待されているのではないかと、一人勝手に疑心暗鬼になっていたのです。

Oyさんは私の大学の後輩にもあたる気安さもあって、率直にその疑問をぶつけました。これに対してOyさんは、私が子どもたちとの建築ワークショップを企画していたり、前年まで地下鉄名城線工事後の街路修景計画を地元住民や名古屋市の関係部署と、まさにワークショップ形式で行っていたことを知っていてくれました。地域の人々の思いを建築やまちづくりの計画につなぐ取り組みを私がしているのに注目したこと、そしてこれまでの建設委員会でいかに地域の方々が前向きに議論しているのか、熱く話してくれました。私にとって、それまでの公共施設計画の研究や計画経験とは異なる活動は、新鮮ただけでなく、自分自身のこれからの建築やまちづくりとの関わり方を考えさせられた経験でした。それをOyさんが評価してくれたので、これも何かの縁ではないかと思い、それな

らばと引き受けることにしました。

はじめて石樽へ

公開ワークショップは土曜日でした。その日の昼間、私は名古屋市千種区の覚王山商店街の秋祭りの中で、小学生がつくった出店で、覚王山をテーマに子どもたちが作ったTシャツや絵葉書を販売するというイベントを行っていました。売れるわけないと思っていたTシャツが1枚売れたときの子どもたちの歓声や、大学生スタッフによる紙芝居を見届けながら、私は石樽に向かいました。近鉄富田駅からは三岐鉄道の2両編成の電車で揺られて大安駅に着き、大安駅からはタクシーに乗って10分ほどで石小に到着しましたが、既にあたりは真っ暗。学校の背後にうすすらと山々の形が確認できました。だいぶ遠くまで来たなあというのが私の第一印象でした。

校長先生や建設委員長のOtさん、そしてOyさんが出迎えてくれて、しばしの歓談の後、公開ワークショップの会場である体育館に向かいました。既に取り壊されてしまった体育館ですが、名古屋よりも秋の訪れが早い石樽ですので、ひんやりとした空気が会場を包んでいました。

体育館の壇上に上がってくれと言われて、皆さんと一緒に上がりましたが、正直に言うと少々違和感がありました。ワークショップという以上、同席する皆さんと一緒に同じ目線で話し合う機会だと思っていたからです。壇上から話をするということで、フロアの参加者と思いや課題を共有



・公開ワークショップの様子
少々違和感を感じながら壇上に上がりました。
(写真提供:石本建築事務所)

するよりも一方向の説明で終わらないか...いろいろな不安が頭の中を駆け巡りましたが、ここまで来たらもう引き下がるわけにもいきません。

公開ワークショップは19時15分から始まりました。参加者は80名程度でした。建設委員会のメンバーが紹介され、教育委員会のKoさんがこれまでの経緯を説明しました。そして建設委員会の委員長であるOtさんが「行政や設計者に任せきりにせず、おらが街の学校を自分たちでつくりたい!」と宣言し、設計事務所の2人が現段階の計画案を説明しました。それを受けて、私がコメントする番になりました。

地域の拠点と子どもたちの安全

私の紹介の後に計画案に対するコメントをしました。全体的には楽しみな計画内容であり、議論もよく積み重ねられていると感じましたが、これからのさらなるレベルアップの期待を込めてコメントしました。

整理すると2点です。1つ目は、この学校を地域コミュニティの拠点にしていこうとするなら、学校教育のための機能・空間以上に地域の人々の「居場所」となるような仕掛けを盛り込んでいく必要があること。2つ目は、1つ目に関連しますが、計画時から使い方を考えるということです。具体的には、ただ地域住民が利用できる空間が用意されているだけではなく、例えば地域の方が常駐して、来訪する方々を迎える空間と運営の仕組みを考えてはどうかという提案でした。実際に、実施案では石樽茶屋という石樽茶を振舞うコーナーが地域開放ゾーンに設置されますが、このような場所にいつも誰かがいて迎えてくれると、地域の方々は訪れやすいだろうと考えました。

またこれ以外にも、地域開放ゾーンは入口を1ヵ所に限定するのではなく、縁側のように外周からそれぞれの部屋に入るといった方法もあり得るのではないか、また多様な使われ方が想定される体育館は外部とのつながりを大切に話しました。これは、地域公共施設の敷居を低くなくてはという私の持論からです。特に前者は管理の方法を考慮してのコメントでしたが、地域ゾーンの管理の仕方、特に休みの日の空間的な仕切り方については、竣工近くになって現実の問題として再浮上することになります。

建設委員も意見を述べ合いました。現在の校舎(RC校舎)でできなかったアイデアや思いを実現したい、石樽の皆さんから学び、見守られた子どもたちが将来、地域の活力となり、きっと石樽を盛り上げてくれると思う、これまでも地域の方々の暖かい支援をいただいてきたが、子どもたちの心を育む場が実現できそうだ、等々。

私への質問もありました。現計画ではジョギングコースが校舎と体育館の間を通っているが、子どもたちの安全面は大丈夫だろうかということでした。1年前(平成13(2001)年)に起きた大阪教育大附属池田小学校での殺傷事件が記憶に新しく、会場の多くの方が学校と子どもたちの



・模型を見つめる参加者
会場には模型が展示され、計画案を確認しました。
(写真提供:石本建築事務所)

安全確保に関心と心配を抱いていることがひしひしと伝わってきました。でも、刑務所のように高い壁で囲まれた学校など誰も望むはずありません。私は、新校舎ができたなら地域の皆さんが日々訪れて、皆さんの目で子どもたちを見守り、不審者を近づけないようにすべきではないか。つまり、学校に皆さんの人気(ひとけ)を感じさせることが大事だと助言しました。

最後に私から、もっと計画の内容や過程を地域に発信して、いろんなアイデアや思いを交換しようとして、公開ワークショップは21時を迎える少し前に閉幕となりました。

地域にどう伝え、盛り上げていくか?

公開ワークショップに参加した人のアンケート回答では、「参加することで計画がよくわかった」と肯定的に評価した回答が大半を占めました。また、学校でいたいこととして「図書室を利用したい」「散歩やジョギング」「体育館や運動場を利用したい」などが上位を占めました。中には「子どもの顔を見にきたい」「花壇の手入れをしたい」という回答もありました。子どもたちの安全確保に関しても、「話を聞いて安心した」という回答があって私も安心しましたが、この話題は年度末に開催される2回目の公開ワークショップでもう一度話し合われることになります。

一方で、参加者が全体で80名ほどだったことから、「参加者が少なく残念」という回答が多くありました。さらに、「くだけた説明と意見交換を委員だけでなく参加者ともした方がよかった」という公開ワークショップの運営に関する意見もありました。参加者の多くは計画案を高く評価していましたが、それをこれからどう地域の人々に伝えていくのか。計画から運営へとつないでいく上での重要な課題が、参加者からも投げかけられていたのです。